知事対談

「静岡知図」をつくり、次代を拓く。

静岡県知事 川勝平太 ╳ 静岡県立大学グローバル地域センター長 濱下武志氏

世界情勢が目まぐるしく変化する中で、グローバルとローカルの関係性を認識することが重要となっている。
静岡県立大学グローバル地域センター長の濱下武志氏と川勝平太・静岡県知事が
古くから続く東アジアの貿易秩序を振り返りながら、
今後の地域間ネットワークと本県が担うべき役割について語り合った。

国家を超える海域

知事　江戸時代の日本は「鎖国」で、長崎の出島で中国とオランダにだけ門戸を開いていたと思われがちですが、実際は、琉球口（沖縄）では中国や東南アジア、対馬口では朝鮮王国、松前口では北東アジアと貿易をしていました。朝鮮王国と琉球王国とは外交もしていました。ロナルド・トビさんの『近世日本の国家形成と外交』（創文社）が「鎖国」のイメージを変えましたね。トビさんには『「鎖国」という外交』（小学館）という本もあります。広い意味での朝貢型の管理貿易といえるものでしょう。

濱下氏　そうですね。

知事　古くから東アジアには国際秩序がありました。「冊封」と「朝貢」の2つから成る朝貢システムですが、いつ頃までさかのぼれますか。

濱下氏　隋・唐ぐらいからと言われています。

知事　朝貢貿易とは別に、アジアにおける異国間の商人の自由な取引をイギリスの経済史家は「カントリー・トレイド」と呼んでいます。

濱下氏　朝貢に関する研究は、中心から周辺を見る視点が圧倒的です。それは中国から朝貢国を見ることですが、これを琉球側から見ると、ほかの朝貢国と交易しながら、ということなので「カントリー・トレイド」というのはいい表現ですね。

知事　朝貢は、朝貢の見返りの回賜品の最大のものは中国銅銭で、東アジアの共通通貨になっていました。朝貢貿易という中国と周辺国の公的関係よりも、その周囲でなされていた商人同士の交易量の方がはるかに大きかったでしょう。

濱下氏　制度では朝貢という形を利用していますが、それによって周辺の交易が非常に拡大しました。例えば、1851年の琉球の朝貢使節は福州へ入り、そこから商人グループを蘇州と広州へ派遣して、絹織物や東南アジアの特産品を薩摩へ持って行きました。実は国際貿易です。中心から見た朝貢貿易より周辺相互の関係がダイナミックで、広くつながる大きな流れがありました。

知事　大航海時代のヨーロッパに国際法はありません。商業と海賊は一体でした。現在の国際法のもとになる『戦争と平和の法』をグロティウスが出したのは1625年ですが、東アジアにはその前から朝貢体制という国際秩序がありました。

　東アジアの交易を歴史的観点から見る書物を二人で編んだことがありましたが（濱下・川勝編『アジア交易圏と日本工業化1500－1900年』藤原書店）、日本語の本なのにイギリスのタイムズ紙が書評にとりあげるほど話題になりました。

濱下氏　評者のマクダモト教授は日本にも造詣が深いケンブリッジ大学の先生です。西洋によって開かれた日本ではなく、アジアに向けて開かれた日本という視点に注目されたと思います。また、中国でも翻訳がなされると聞いております。

　現在の国際関係は、19世紀後半からの約150年を、新しくできた環境として論じますが、実はそれ以前から続いている歴史の一つの変化と見るべきでしょう。長期に続いているものはどんな仕組みだったのかを見極めることが、現在、あるいは今後を考える重要な視点になります。今、国民国家としてなされている議論は、形は国民国家のように見えますが、実際は、長い歴史の中の関係で見るべきで、国民国家の枠組みだけでは捉えきれません。

知事　ヨーロッパはECからEUになり、共通通貨ユーロもできました。イギリスは離脱しましたが、EUは国民国家を超越する共同体です。国民国家とは別の単位をどのようなコンセプトで考えれば良いか。「地域」になりませんか。

濱下氏　その地域も海に関連した地域と海域の組み合わせで考えたい。例えば、バルト海周辺の100数十の沿海都市が参加しているバルト海都市連合UBCでは、将来の沿海都市の環境問題や人材教育などを歴史的課題も含めて議論しています。背景には中世のハンザ同盟からの都市間交易の蓄積がありますが、東アジアにも海を周縁とする地域と海域の組み合わせ、沿海都市関係、あるいはネットワークがありました。それらは国家の枠組みで捉える時代の中で中断されましたが、今後もう一度考えられないだろうか、そのような未来像を私は描いています。

知事　陸の「地域」に対して、海の「海域」ということですね。

フィールドから描く静岡知図

知事　静岡県立大学グローバル地域センターの前身は静岡総合研究機構です。国土計画など国の施策を地域レベルで活用するシンクタンクでした。しかし、もう政府が地方に命令する時代ではありません。そこで、中央に対する「地方」ではなく、SDGsに代表されるグローバルな動きの中での「地域」の一つとして本県を捉え、名称を「グローバル地域センター」にしました。海域、地域、ネットワークなどに関する地域研究を自由にやっていただきたい。

濱下氏　私は、静岡の「知図」をつくろうと思います。「ちず」の「ち」は、「インテレクト」の「知」です。それは、実際の動き、あるいは歴史的なあり方を見ていかないとできません。もちろん空間地理図の方法もありますが、目指すのは、グローバルな「静岡知図」です。例えば漁業海域、あるいは林業や山林もそうですが、それが紙という仕事につながり、あるいは多様な技術につながるという、いろいろな「知域」を生み出す、知の集積に基づいた「静岡知図」です。それをベースに、浙江省寧波港と清水港の交流のように、人が行き来することで、お互いのフィールドができる場を形成できれば、と願っています。

知事　地域は「リージョン」や「ローカリティ」とも訳せますが、「フィールド」とも言えます。例えば、製紙業のフィールドは、どこの木材なのか、製品はパルプか、和紙か、それをどの市場に出すのかなど、具体性と地域性があります。フィールドに即した知性を構築するのは新しい知の冒険です。「フィールドワーク」とは実践的な地域学です。フィールドワークは地域の自然環境、生活、産業などと結びついています。グローバル地域センターは、例えば、パルプをインドネシアから輸入しているなら、インドネシアで働いている人々とつながり、輸出先が韓国であれば、韓国の人たちと結びつく。もともと知は、国境を越えるものですが、フィールドワークという実践的な地域研究をしていただきたい。

「静岡知図」をつくり、次代を拓く。

濱下氏　そうです。留学生も、そういう目的で交流すれば、本当に実学や経験知に加えて概念知というのでしょうか、もっと言えば、理念の領域までつながる知の循環を考えるようになり、留学生の人的な交流も、地域と地域の交流という意味を持つようになります。現在、寧波大学との交流はその方向で進めています。

知事　海外からの留学生は年ごとに増えています。彼らは日本の現場のフィールドを学びに来ています。受け入れ側の我々は、彼らの知的関心に即した現場を学ぶ知の体系を立てる必要があります。製紙、稲作、茶づくりなどの本県の現場をフィールドワークで突き詰めていくと、われわれの宗教観、世界観、自然観なども視野に入ることになり、グローバルに見れば、中国の儒教的世界観、インドのヒンドゥー教的世界観、インドネシアのイスラム教的世界観なども問われます。

濱下氏　そうですね。アジアを考えるとき、ムスリムや海洋などの問題はもっと議論されるべきです。それを静岡のフィールドの中に組み込んでいくことが当センターの一つの課題でしょう。

知事　ギリシャのアリストテレス的な知的体系は、中世にアラビア語に訳されてイスラム圏の学問になりました。それがラテン語に訳されてヨーロッパの自然科学を生んでいきます。ギリシャ哲学はイスラム教圏を媒介にして近代ヨーロッパの学問の基礎になったことを理解することも重要です。イスラム教圏は、海域的には、環インド洋に広がっており、現在のその人口は世界中に拡大しています。そういうグローバルな観点を持って地域研究フィールドワークを捉えるべきですね。

地域の知を生かす 地域同士のつながり

濱下氏　寧波大との交流の背景には、静岡県と浙江省の約40年にわたる友好交流の歴史があります。寧波は、長崎との日唐貿易以来の関わりが大きく、寧波港の歴史は、船や商業の面で日本とつながっています。そこで、寧波港と清水港の比較を始めて、港、海、湾、川、海運、灯台、漁業などの歴史を見ながら、海域を具体化していく試みを進めています。大学院生や学生もその行き来の中に入れて考えようということで、「21世紀アジアのグローバル・ネットワーク構築と静岡県の新たな役割」に関する調査研究のプロジェクトとして、一昨年から相互に訪問し、それぞれの地で国際会議を開催することを始めました。

知事　まさに地域の知の体系化ですね。

濱下氏　知のフィールドでもあります。こちらからも向こうへ出かけ新たなフィールドや、地域に根ざすことで、今までできないと思っていたことが開けるフィールドを示すことができたと思います。こちらのフィールドを寧波にも投げかけられた背景には、静岡県と浙江省の間に非常に大きな交流の蓄積があったからです。例えば、お茶の資源は両県省に共通しますし、舟山列島の近海は、歴史的に重要な漁業資源の中心で、焼津との比較対象になります。そして、海域に対する知識の蓄積を比較できます。

知事　静岡県は、尖閣諸島問題が先鋭化したときも、浙江省との友好を大切に継続しました。地域間関係を大事にしており、国際でなく「地域際」というか、地域間の交流を大切にしています。

静岡県立大学グローバル地域センター長
濱下 武志氏

1943年生まれ。静岡市出身。東京大学名誉教授、東京大学東洋文化研究所所長、京都大学東南アジア研究所教授、中山大学（中国）アジア太平洋学院院長、龍谷大学人間・科学・宗教総合研究所研究フェローなどを経て、2016年から現職。

濱下氏　寧波のコンテナ扱い量が上海を抜く勢いです。陸のシルクロードの東の終着点は浙江省ですね。

濱下氏　義烏（ぎうう）ですね。日用品卸売市場として大きな世界的マーケットです。

知事　浙江省は海と陸のシルクロードの東の拠点です。中国の「一帯一路」プロジェクトはどうなっていくと見られていますか。

濱下氏　今は強力な国のサポートによって進められていますが、次第に地域と地域のつながりが問われると思います。例えば東南アジアの場合はどうなのか、中東地域は、あるいは中央アジアは。そういう次の段階に入ったとき、ある地域の特徴が地域相互の蓄積と結びつくかが課題になります。アジアのネットワークは、北東アジアや朝鮮半島にもあるので、そういう広がりを「地域と地域のつながり」という視点から追っていくことが、次の段階に備える課題でしょう。

知事　まだ国民国家的思考が強いですが、中国の歴史は国民国家のそれよりも長い。浙江人、広州人、香港人、台湾人といったアイデンティティーもあります。北京語は戦後になってはじめて共通語になりましたが、一つの国民国家に収れんするのか、それとも地域性が際立っていくのか。

濱下氏　「中華民族」という一つの名称も、実体というよりそれぞれの民族をつなぐ概念ですから、両方を進めるということになると思いますね。

知事　人は地域に生きるとともに移動します。最近は「流出人口」「流入人口」よりも、「関係人口」という地域間を往来するネットワーク人口が増えています。移動人口だけでも10億を超える現代、最終的にどういうコンセプトに落ち着くのか。

　アイデンティティーは多重であり得ますから、ナショナルアイデンティティーだけで論じるのは、実態と合いませんね。

濱下氏　華僑研究もかつては、出る側と来る側に分けて論じていましたが、実際は相互に行き来しており、今は、双方向で見るべきというのが研究の中心になっています。地域を見る場合でも、出る、入る、行き来するという関係人口を知ることが、知の関係性につながるでしょう。

知事　そうですね。関係人口が多くなると、離れた地域間で友達ができます。そういうネットワークを広く深く張っていけば、相手のことをよく知り、戦争もなくなる。地域間の関係を理論化することが、グローバル地域研究の狙いでもあります。ネットワークは人が担い、人同士の関係です。裏切りや変節があると信頼をなくしますが、信頼が関係をより強くしていく側面もあります。静岡県民は、富士山に対して恥ずかしくないことをしていれば、間違いない。本県のグローバル地域センターの使命は大きいと思っています。

濱下氏　日本の地域は昔から、隣の地域を見るだけではなく、むしろ外の地域、外に向かって海をまたぎ、海を活用し、海域と地域のつながりを持っていました。海をまたいだ知の集積は今も、将来も大いに活用できると思います。

知事　これからも、よろしくお願いいたします。

静岡県知事 川勝 平太

1948年生まれ。京都市出身。早稲田大学、同大学院を経て英オックスフォード大学で博士号取得。早大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長などを経て2009年より現職。現在3期目。

アジア交易圏と日本工業化
1500-1900（藤原書店刊）

濱下武志・川勝平太 編